まだ覚えていますよ
一人の彼の名は
エドガー
もう一人の
彼の名は
アラン
リデル・森の中
彼らはわたしを
リデル人形と
よんでいたのです

そこはいつも
森の中
ある時は
しらかば林

また
ある時は
花の野辺

水辺の
谷間
いちいの森と

夏がくると
いつも
森から
べつの
森へと
わたしたちは
移り住んだ
のでした

時どき
だだも
こねましたが
いやん いやん
ここ好きなのに
リデル ここに
いたいのに
さあ

リデル人形
いい子だね
今度行く
とこには
桃の木が
あるよ
モモ?
かわいい
花だよ
ぼくたちは
知ってる
リデルにも
見せたいな

わたしは
いつも
なだめられ
心は
はや
次の森へ

わたしはたくさんのことを学びました

なにしろこのころエドガーとアランのほかに人間なぞ一人も見たことはなかったので

少し
大きくなったころ
次の森へ行く途中
初めて村と
村人を見ました
へい
いらっしゃい
リデルったら
さっきから
目をまるく
してるよ
――こわくは
ありません
でした
エドガーと
いっしょ
でしたから
でも
わたしより
小さい子
たち
エドガーと
アランより
巨大な
人たち
なあぜ
なあぜ
なあぜ
なあぜ
あんなに
たくさん
なぜ人が
いるの？
あの人たちも
夏にはべつの
森を
さがすの？
大きい人
なあに？
小さい人
なあに？
コールド
チキン
きらい
食べるの
人はね
毎年
ひとつずつ
大きく
なるんだよ
リデルは
…七つかな？
今年で
エドガーは
十四かな！
ちがうの！
エドガーも
アランも
どうして
チキンを
食べないの！
リデルに
ばっかり
食べさせてェ！
それは
ほんとでした
彼らは 香りのある
お茶のほかには
ほとんどわたしへの
おつきあい
ほどにしか
ものを
食べません
でした
…それはね

リデルが大きくなるからさ
リデルはぼくたちよりも大きくなるよ
さお食べ
キョン
わたしがエドガーたちより大きくなる？
エドガーはいまだってわたしの倍以上あるのに
エドガーは？
アランは？
ぼくたちは……大きくならない
じゃリデルも大きくなんなーい！
カチャン！
セッセセッセ
バラはいつも移り住む家の庭に窓に咲きみだれていきました
罪をおかした血のようにあまりに赤く美しく
ものいいたげに風にゆれ

森での
世界は
調和をもち
歌のように
日びはすぎて
ゆきました
それでも
時おり
わけもなく
不安に
なったのは
なぜでしょう
エドガー！
アランを
いじめちゃ
だめでしょ！
アラン
泣いてた
から！
時どき
おこる争いの
中で
つねにわたしは
アランの
味方でした
どうして
ケンカ
するの？
彼の
ほうが
弱かった
ので
…エドガーは
ぼくが
きらい
なんだ…！
うそよ
うそなもんか
リデルも
きらい
なんだ！
…うそよ
ほんとさ
いつだって
追い出すって
いってるん
だから！
リデル！

どこへ行ったんだ　リデル
どこにもいない
アラン！知らないか？
ピク

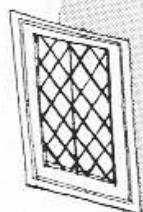
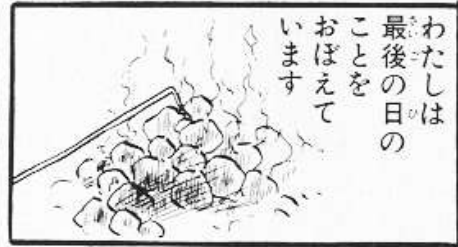
追い出す!?
リデルにそんなことを言ったのか!?
ほんとのことじゃないか

あの子は……
わあん！

リデル！ずっとここにいたの？

リデルを追い出さないわね
リデル追い出しゃしないよ
リデルをきらいじゃないわね
リデルちっとも
！

アランも？
もちろん
みんなで大きくなるのよね
そうだよ

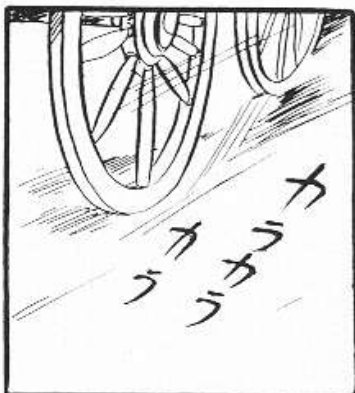
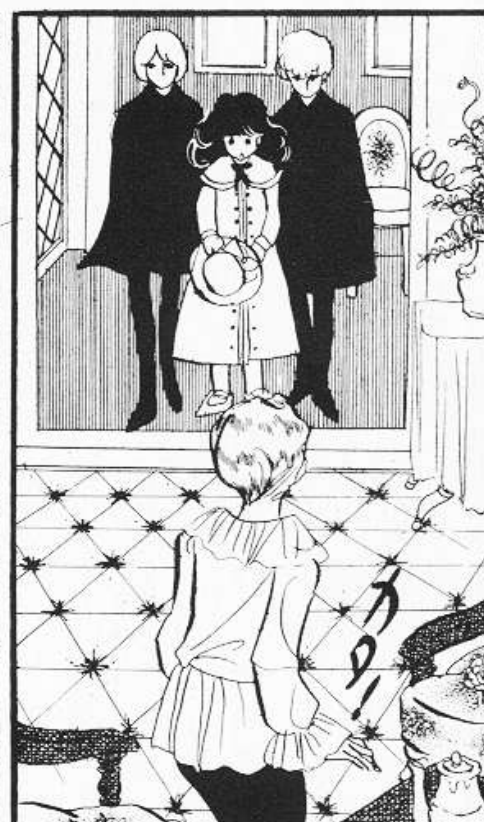
でも結局──
わたしは森から出なければなりませんでした

でも
あなたも
ふしぎなかたね
どうして
うそかほんとかも
わからないような
こんなおばあさんの
子どものころの話を
お聞きに
なりたいの
オービン卿？
……
いつでも
エドガーという
少年の名が
わたしを
よびよせて
やまないのですよ
でも
わたしの
話は
今度
どうぞ
つづきを
リデラード・
ソドサ夫人
あなたは結局は
森の中から
町へ
帰ってきた
のでしょう
……
ええ……
祖母のもとに
祖母はわたしが
二つの時に
ゆくえ不明に
なってから
ずっとずっと
さがしつづけて
いたのです
わたしの
両親は
馬車旅の
途中で
なに者かに殺され
わたしは…たぶん
さらわれたのでした
……
いろいろと
空白の部分が
あります
わたしは
エドガー
たちに
どうやって
出あった
のか
彼らは
わたしの
両親の死を
知って
いたのか
でも…とにかく
わたしは
彼らと
暮らし
どうやって
エドガーが
わたしの
祖母を
みつけ出した
のか——
十歳の
春に……

わたしは
ずいぶん
あとになって
(すっかり
おとなに
なって)
このお話の
のってる
本を
見つけました

それは
古い
北欧の
物語でした
……

あの時の
火が
あたたかさ
あかるさを
わたしの
胸の
どうきを
思い出し
ました

一度村を
見たことが
あるとはいいえ
木のかずほどの
家いえ　葉のかずほどの
窓　窓　また窓
そのひとつひとつに
顔　顔　顔　顔
わたしが
初めてみる
町に
おどろき
あきれてる
うちに
馬車は大きな
家のまえでとまりました
カラン♪
カラン♪
リデラード!?
リデラ!!
カタ!

リデラ
リデラ
おばあさんよ
エドガー!
いや!
おばあさんよ
あなたの
……
リデラ
さがしたのよ
きっと
生きてると
エドガー!!
アラーン!
ドアをしめて!
その子を
出さないで!
エドガー!!
エド
ガー!
これは
どういうこと?
これは
どういうこと?
彼らは
どこにも
いない
なぜ?
わたしを
追い出した?
なぜ?
うふ
リデラ…

──でも
結局わたしは
育ちざかりの
十歳の
少女でした
それまでに
わたしはたびたび
熱を出し
口をきかず
ものかげに
かくれ
でもやがて
わたしのために
買ってもらった
イヌに
なつき
病熱のため
ひきこもった
いなかの
別荘が
気にいり
たえず
わたしに
ほほえむ
祖母が
好きに
なりました
わたしは
やがて
なれました
そうして
わたしは
森の世界から
ひきもど
された
人間の世界で
目ざめ
歩き出す
ことを
始めたの
でした……
わたしは
作法や
人や町や
うわさ話や
つきあいや
殺人事件や
新聞や
おせじや
パーティーや
いろんな
ことを
知り始め
ました
お茶
飲む?
おばあ
さま
リデルや
いい
お嬢さんは
お茶いかが?
というのよ
きれいな
服を
着ている子は
お父さんが
えらいの
だとか
きたない
服を
きている人は
お金持ちでは
ないのだとか
……
そういった
ことが
形をとり
始めるころ
──

とつぜん
——
わたしは
気づきました
エドガーは
大きく
ならないの?
ぼくたちはね
まるで
絵から
ぬけ出た
画像では
ないか
わたしの
育ての親たちは
——
なに者だったの
だろう?
毎夏
毎夏
新しい
バラを追って
森を
かけて行った
彼ら
は——?
コールド
チキンを
お食べ
大きく
なる
ために
エドガーは?
十四……
ぼくたちは
大きく
ならない
大きく
ならない——
彼らは
そのままなのだ
わたしだけが
年ごとに
年をとり
だから
彼らは
わたしを
見はなし
たのだ
わたし
だけが
年を
とり

わたしは毎夜
窓をあけて
眠りました
成長を止めるには
死ぬしかなく
でもわたしは
死ねやせず
それでも
彼らが
とつぜん
訪れは
しないかと
そして
いつか
窓を閉じ
たのでした
わたしは
結婚しました

そうしてさらに
年がすぎ
すっかり
生まれた時から
いい両親のいる町中の
いい家庭で
育てられた
かのような
婦人ぶり
わたしは
夫を愛し
こどもたちの世話をし
友人と語りあい
いそがしい
幸福な日びに
満足
なのです
―でも時に
そんな日びの中で
どうしようもなく
せつなく
昔の
わたしが
うかんで
くる

「リデル♥森の中」　1975年4月